

本田財団レポート No.103

「建築領域から観た日本文化の存在感」

(株)菊竹清訓建築設計事務所代表取締役
建築家

菊 竹 清 訓

講師略歴

菊 竹 清 訓 (きくたけ きよのり)

建築家/工学博士



《略 歴》

- 1928年 4月生まれ
- 1950年 早稲田大学卒
- 1953年 菊竹清訓建築設計事務所設立、代表

《業 歴》

日本建築士会連合会名誉会長
国際建築アカデミーアカデミシャン (I.A.A. アジア代表)
フランス建築アカデミー会員
アメリカ建築家協会特別名誉会員 (H.F.A.I.A.)
プエノスアイレス大学名誉教授
北京工業大学名誉教授
海上都市計画コアメンバー、ハワイ大学客員教授
マクロエンジニアリング学会元会長
2005年日本国際博覧会総合プロデューサー

《受賞歴》

- 1952年 建設大臣賞 ローコストハウス競技設計 一等
- 1964年 第7回汎太平洋賞(アメリカ建築家協会) - 出雲大社庁の舎
第14回芸術選奨文部大臣賞(文部省) - 同上
第15回日本建築学会賞(日本建築学会) - 同上
- 1975年 久留米市文化功労賞(久留米市) - 郷里より受賞
- 1978年 第8回オーギュスト・ペレー賞(国際建築家連合) - 方法と作品に対し
- 1979年 第21回毎日芸術賞(毎日新聞社) - 京都信用金庫店舗 一連の作品
- 1990年 第31回BCS建築賞(建築業協会) - 川崎市市民ミュージアム
- 1996年 平成7年BELCA賞 ロングライフビルディング部門 - 出雲大社庁の舎

このレポートは、平成15年(2003年)2月24日 パレスホテルにおいて行われた第88回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです

「建築領域から見た日本文化の存在感」

(株) 菊竹清訓建築設計事務所代表取締役

建築家 **菊竹清訓**

只今ご紹介をいただきました菊竹でございます。丁寧なご紹介で痛み入りました。

現在、建築から見て、日本文化の存在感が少し薄れてきているのではないかということがマスコミ等でしきりに紹介されております。また、建てられる建物がほとんど、グローバルなデザイン、あるいはインターナショナルスタイルになっている。これが日本の建築なのか。日本らしさとか、日本建築の持っている伝統的な良さが全く薄くなっているのではないか。そのような批判が多くなっているようです。このまま行くと本当に文化を喪失してしまうのではないかと一部に言われたりしております。では実際にはどうなのか、今まで一般に言われて紹介されている角度と違ったところから、そうではないという存在感につきお話しできたらと思っております。

実は今日のこの機会が故・本田宗一郎顧問の財団の企画ですので、少し自由にしゃべらせていただくのがいいのではないかと思うからです。海外の講演なりシンポジウムなりでこういう話をしてきました。その一端をご披露申し上げます。ただ単なる日本の紹介とか、あるいは日本建築紹介の時代から変わってきました。本当に日本建築は現代において何を考えているのか、何を世界に発信しているか、未来をいったいどう捉えているのかというようなことを議論する機会が増えてまいりました。そういうことで私の申し上げることをお聞きいただき、間違っているところについてはご批判をたまわり、これからも日本文化を示すものとしての建築を誇りとして語っていきたいと思っております。

ドイツ人建築家・タウトの誤解

日本の伝統、日本の文化を語るときにはどうしても伊勢神宮と出雲大社を取り上げてお話しするのが順序ではないかと思えます。

伊勢は皆さまよくご承知のところですが、私は第 66 回の伊勢遷宮のときに文化人の 8 人の 1 人に加えていただきましたので、間近に伊勢の正殿を見る機会に恵まれました。そういうことから正殿についてお話ししたいと思います。

もちろん伊勢の神宮（写真-1）は、日本を代表する、立派な、世界的に素晴らしい建築であることは間違いありません。ただよくよく見ると、必ずしもそうばかりも言っていられないような問題があるという



（写真-1） 伊勢神宮内宮（高さ 10m）

ことを、今日は特別に申し上げようと思います。

文化人がやる庭燎という役はどのようなものかという、焚き火をする役目です。夜、宝物を旧殿から新殿に移すわけですが、そのときは真っ暗ですから瑞垣の中で境域だけはほのかにわかるようにということで焚き火をするのです。古いほうに8人、新しいほうに8人がつきます。この庭燎という役目は神社のほうのご説明を伺うと、前の日から水は一切制限されます。いったん瑞垣の中に入ると終わるまで外には出られません。昼間から所定の位置に詰めまして、夜になるのを待つという格好になります。その間、お手洗いには行けません。そのために水の制限があるわけです。そのお陰で、実は瑞垣の中には誰もいませんので柱とか床下だとかいろいろなところを細かく見ることができます。

その中でいくつか発見がありますけれども、二つだけお話しします。

一つは棟持柱です。伊勢の神宮ではこれは素晴らしく美しい柱であると言われてきました。建物の荷重をこの柱で支えていると言われ、立派な柱で支えている美しい建築とみんな誰もが思ってきたわけです。ドイツのタウトという建築家も日本に来たときこの柱を見て伊勢の棟持柱は実に立派だと言っております。ところが、この棟持柱をよくよく見ますと棟木との間に約20mmぐらいの隙間が空いています。なぜこの隙間が空いているかそれは謎でした。これまで説明されてきたのは、神殿が古くなるとだんだん沈下してちょうどいい具合になる、そのためにあらかじめ空けてあるというのですが、それは正確ではありません。何故なら屋根を支えているのは校倉という壁ですから、柱は要りません。つまり柱はお飾りで付いているということです。お飾りで付いている柱を、非常に力強く美しいと言って褒めて帰ったタウトのような非常に眼力のあるドイツの建築家でも間違った判断をしてしまったということです。同じような指摘を最近、学者が論文でのべています。しかし、こういうことは日本の建築だけに限ったことではありません。

アテネのパルテノン神殿(写真-2)は、ヨーロッパでは美の典型と言われている建築ですが、非常に美しい柱でとりかこまれて建っております。このすばらしさのために博物館の建物と言えば全部このギリシャ建築の列柱でデザインされていますし、銀行もだいたいこのギリシャ建築の真似をして、柱がいっぱい立っています。

ところが、問題はこの柱はいったい何を支えているか。



(写真-2) パルテノン神殿(BC438)

私は近寄ってよくよく見ました。パルテノンには実は壁が屋根の荷重を受けていたのです。ちょうど校倉造りの壁が屋根の構造を受けているのと同じように、ここでも柱の内側にある壁が屋根の荷重を支えています。壁を壊されたから屋根も落ちたのです。しかし柱のほうは屋根を支えてはいませんから柱が残ってそれを見ることができるというわけです。つまり柱はお飾りだったのです。

ギリシャの柱は、エンタシスとか、フリュエティングとか、石の加工技術がすばらしく非常に美しいと言われてきましたが、それは全く装飾的に作られたものだったのです。だから柱の数も正面は7本であろうと8本であろうといっこうに構わないわけです。実はそういう飾りに作られたものがたいへん美しいと言われ、力を本当に受けているかのように評価されてきたのは東西に不思議なことです。建築では時々そういうことが起こるということをおの例からくみとっていただきたいと思います。何でも機能的に美しいというのではなく、建築にはそういうお飾りの要素がずいぶん入っているということです。

巨大木造建築の驚くべき知恵

日本の木造建築が文化的に非常にユニークだと思いますのは、一方に伊勢神宮のように小さな非常に繊細な建物があります。千木の最上まで約10mしかありませんけれども、実に細かいところまで美しく洗練されています。そういう建物に対して他方、出雲のような実に豪壮な神殿があります。木造建築でこれほど巨大な建物は世界的にみてなかったし、いまでもこういう建物を造ることはできないだろうと言われるぐらい大きな建物です。よくぞこんな大きな建物を造ることができたと思うような豪壮な建物と、非常に小さな繊細な建物。この二つの文化的にみて対比的なシンボルを私共は持っているということは確かです。これは貴重な歴史的遺産だと思います。

出雲の例に移りたいと思います。(写真-3)

出雲の場合は真ん中の芯になる柱と周りの合計9本の柱で平面はできており、正方形です。正方形の平面で、塔のような高層建物は、造ろうと思えば、造れるのです。

構造的に非常に安定していてこれなら造れる。歴史学の福山敏男先生の復元図がありますが、おそらく45mぐらいあったのではないかとされています。丸ビルの1倍半の高さで

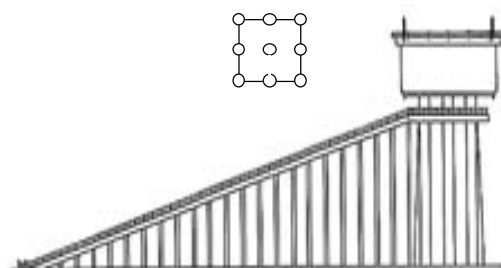


写真-3 出雲大社本殿(福山敏男復元案)

すがこういう高さのものが木造だけで実現していたということは驚き以外にありません。そんなに高い建物でいったい何を表現しようとしたのか興味をひかれます。

ここに一つの面白い問題があります。それは間仕切り壁です。この神殿には壁があるのです。このため正面から見ると神さまがちょうど西向きにヨコ向きの形で祭られています。なぜなのか。これはまだその理由がわかりません。いろいろな方が推理されおそらくこれは住居ではないか。住居説では中の間仕切り壁は部屋だったに違いないというわけです。だいたいこの住居説が主流になっておりますが、私は実はこの建物は蔵ではないかと考えました。蔵ですと大きい建物を造れば多くの人達の食糧を支えることができますから、大きな集団社会のシンボルに大きい建物を造る意味があります。そこでこれは蔵に違いないとしたわけです。

私の実家が地主で米蔵があったのですが、米蔵がどうなっていたかということ、四角の平面の真ん中に柱があって、そこに一つ壁がありました。俵とかいろいろなものを入れると倉の収容力が減りますから、仕切板を渡してその板の中にどんどん米だけを入れます。米がいっぱいになると今度は次の仕切板をその上に渡してその高さまで入れる。奥のほう全部米だけになりましたら今度は次の仕切板を入れ、また米を入れていきます。米蔵というのはそういう形でできております。ですから、私はたぶん蔵ではないかと直感的に思ったのです。そのときには私は胴長の実にみっともない復元図を作りまして40年前に雑誌に発表いたしました。ともかく出雲大社は非常に豪壮な高層建物として実現していたということです。

ところが、豪壮な建物なのですが何しろ高さが高いため、倒壊した記録がずいぶん残っております。伊勢のほうは20年毎に建て替えられておりますが、出雲は60年毎に建て替えられていたようです。倒壊の記録では上に上がっていく階段を「引橋」と書かれています。これが大変なことで、いまのスキーのジャンプ台よりも凄まじい格好になっています。幅が狭くてヒューッと45mの高さまで建っているわけです。だから本殿の倒壊記録はいろいろあっても、本当はいちばん倒壊したのはこの引橋と言われる階段(きざはし)の部分ではないかと想像します。当然これを持たせるのは容易なことではない。とにかく出雲大社は、実に面白い世界でも不思議な木造建築だと思います。

これだけの高さのものを造るには当然材料として大変な巨木が要ります。いまから約2000年ぐらい前の日本は温暖で巨木が生育したという記録もありますので、あるいはそういうものを利用できたのかもしれない。ところが、巨木がだんだん手に入らなくなって

くると代わる工法を考えなければならなくなります。そこで直径が 1.5m ぐらいある大きな丸太を 3 本組み合わせ、鉄輪で縛ってそれで高い建物を造ったという、金輪の造営というのが記録に残っております。これは実にユニークな方法です。これだと本当にやろうと思えば 45m でも 50m でもできます。3 本ずつで、しかも互い違いに継いでいくとすると長いものができます。ですから巨木自体で巨大建築を造るという時代から、いくつかの木材を組み合わせで造っていくという時代に変わっていった。

これは記録に残っていましたが、実際に出雲大社の正面のところを発掘して、その金輪の造営の 3 本を組み合わせた柱の根元が去年出てきました。この木材は展示されておりご覧になれます。これは驚くべき知恵です。しかも、そういうものがきちんと書類に残されていて、そのとおりだったということがわかり、日本の技術の偉大さというもの、また記録の正確さを改めて感じさせられました。

蓄積型文化と循環更新型文化

金閣寺（写真-4）はよくご存じの建築だと思います。金閣寺を建築様式的に見ますと、1 階が寝殿造り、2 階が書院造り、その上が禅宗の造りです。階によって歴史的に様式が違いそれを重ねた建物です。金閣寺はたいへんユニークなのですが、様式が変化していくなかで、これを建築にどのように取り込んでいくかというのは日本だけでなく世界のどこでも起こっていることです。その一つがサンマルコの広場にあるドゥカーレ宮殿です。

（写真-5）下階がゴシック様式で、その上にビザンチン様式が重なっています。階別に様式を組み合わせており

ます。様式と言ってもいいし文化と言ってもいいのですが、どの国も新しい文化を造っていくときには過去にあった文化との組み合わせが行われており、歴史的にその痕跡を残しております。これを見ていただくと文化ミックスのプロセスがたいへん面白いと思います。200 年、300 年かかって建てた寺院などにはそういう例がざらにあります。特にヨーロッパの中央のベルギーあたりの寺院を見ますと、奥のほうからずうっと様式が違っているものがあります。



写真-4 金閣寺

禅宗様式
書院造り
寝殿造り



写真-5 ドッカー

ビザンチン様式
ゴシック様式

日本の場合もそれぞれ様式が変化してきています。日本で最初に神殿造り(4世紀)と呼ばれる高床様式ができ、それから寝殿造り(8世紀)、書院造り(12世紀)、数寄屋造り(16世紀)ができて現代に至っております。



写真-6 12世紀 江戸城



写真-7 16世紀 桂離宮

だいたい400年ごとに変化して建築が進展してきていることがわかるわけです。自動車のリコールで有名なハーバード大学ネーザン・グレンザー教授は私の四百年説に対して「変化はだんだん早くなるのではないか」と質問がありましたが、文化は技術と違って普及には時間がかかりますので、だんだん短くなってはいません。ヨーロッパの場合も、ルネサンスの前にゴシックがあり、ビザンチン、ローマがあり変化してきております。とくに興味をひかれるのは、ユーラシア大陸での文化の伝播です。蒙古が中国文明を東と西に伝播させた16世紀の時代です。そのために、日本の江戸文化とイタリアのルネサンスとが、同時に16世紀に華やかに展開すること

になっている点です。その源は中国の文化であり文明です。なぜそういうことに気がついたかといえば1988年に、シルクロード博のプロデューサーをやったとき博覧会のテーマを何にするか、井上靖先生、樋口先生と議論をしていて、たいへん面白いことに気がつきました。それはシルクロードのちょうど中央崑崙山脈のあ



たりから東と西でもの考え方が違うということです。文化が違う。西のイタリアのほうに行きますと、空を飛ぶというときに、ミケ像などでご覧になりますように、天使でも何でもみんな羽根を付けて飛びます。しかし、そんなことは実際できません。東のほうの日本はどうかというと、雲とか羽衣のようなひらひらとしたもので飛んでいる。同じ空を飛ぶのでも発想が違います。それで「飛天」というテーマで博覧会をやるということに

なりました。シルクロードの真ん中で東と西との文化が違うということを考える博覧会にしようというわけです。

これは建築でいうとどういうことがあるかと言えば、ヨーロッパのほうは干乾し煉瓦や石などで建物を造っています。ウルという町ではとにかく掘っていくと前の時代の町がそっくりそのまま出てくる。さらに掘っていくと、その下にも同じ都市が出てくる。それが7層にわたって出てくるという、よくもそんなことを繰り返しやったものだと思うのですが、これは蓄積型の文化だからです。

そこで言えることは、干乾し煉瓦や石で造るということは1回性であり、いいかえれば1回性で建築を造ることによって技術の進歩がほとんど起こりにくい。それに対して東のほうは木造や天幕です。移動して生活をするので、天幕ですと解体・組立が簡単で軽くてすぐできる特徴があり、何べんも繰り返しますから、技術がどんどん進歩します。つまり蓄積型の文化と循環更新型の文化としてみると、おおよそ正反対の方向がみられます。私は、これから一層ヨーロッパの文明あるいは文化よりも日本の文化のほうが技術的にみても進歩が速いし、文化のレベルが普及しやすいと考えております。それを少し証明をしなければいけないと思って様式の変化をみることにします。

ヨーロッパの場合、16世紀ルネサンス以降、大航海時代が来るとスペインが覇権を握ってスペインの時代(17世紀)がずうっと続くことになります。この期間が100年ぐらいで、そのあと英国がスペイン艦隊を破り、建築では英国のチューダー様式(写真-8)が次の時代の文化になります。それがルイ王朝のフランスに移り(19世紀)、さらにアメリカに移って、20世紀にはコロニアルスタイルというアメリカの様式が支配的になります。しかし、建築的に見ますと、イタリアの様式も、スパニッシュスタイルも、チューダー様式も、フレンチスタイルも、日本と比較すると、特に優れたものではありません。コロニアルに至っては植民地様式です。しかも、持続性は100年ぐらいの短い歴史しかありません。それをなぜ日本はありがたいがって、スパニッシュだ、フレンチ様式だとなるのか。会場のこの建物も多少フレンチスタイルになっておりますが(笑)そういうものをありがたいと思うのは戦争に負けたせい、それはビジネスの対象になっています。400年毎の日本の様式と比べたらはるかに短く



写真-8 18世紀 チューダー

劣るわけです。西欧の様式には100年だけの歴史しかないことを指摘したいと思います。

いちばん生活しやすい日本の住宅

つぎに様式を選択で大きな間違いを冒した文化の例について申し上げます。戦後アメリカの近代美術館(MOMA)で実物大の住宅を二回展示したことがあります。アメリカのコロニアルスタイルという植民地スタイルはあまりにも貧相だから、もっと近代的な住宅に変えなければいけないのではないかと。そこで一回目はマルセル・ブロイヤーというドイツ人による住宅の形式(写真-9)をそっくり美術館の庭に復元して一般の人達に見せたのです。



写真9 MOMAでのM.ブロイヤーの住宅



写真-10 MOMAでの吉村書院

二回目はこういう住宅が東洋にあるというので、吉村順三先生に日本の書院造りの建物(写真-10)を造りました。畳敷きで、お昼間は開放的に広々と生活出来るようになっている。そういう住宅です。キュレーターはこれによってアメリカの人々に、ヨーロッパを選ぶか日本を選ぶか考えなさいと言いたかったのでしょう。

ヨーロッパのほうは、平面の真ん中に台所やバスルームの設備があって、この片側に接客用のリビング、他方がベッドルームの個室になっています。機能的に見ると非常にうまく分かれていて近代的な生活が出来ます。しかし、何を思ったかアメリカの人々は両方とも選択せず依然としてコロニアルスタイルを踏襲しています。コロニアルスタイルにはヨーロッパから渡ってきた移民のノスタルジーがあるのではないかと思います。それほど住宅の様式は保守的なのでどちらがいいかアメリカ人でも合理的に選択することが難しい、これが文化の問題です。

ましてや、日本でどういう住宅がいいかとなると、いま建っている建物は千差万別で、ほとんど選択ができないような乱立状態になっているのではないかと思います。

つまり、日本の住宅の良さをほとんどみんな忘れてしまっているかのようです。人が生活するスペースとして、なるべく広く、風通しが良く、昼は広く使い、夜は建具で仕切っとうまく住み分ける。しかもちゃんと床の間が付いていて、花や美術品を飾るこういう住み方がよかったです。それでお客さまがあったらどここの部屋でおもてなしをするか、生活の自由と選択があるわけです。

私と同じ年齢のカリフォルニア大学の心理学者のロバート・ソマー教授がこういうことを言っております。「この部屋は接客をする場所だ、この部屋は寝る場所だというヨーロッパのような生活を規制する住宅を造っていたら究極的にプリズン（刑務所）になってしまう。そして部屋には大きな家具を置いている。家具が邪魔で、部屋をどう使おうかという自由度が全くない。こういう生活を拘束する建築は、結局、行き着くところプリズンである」と警告しています。

それと対極的な建物が日本の和風の住宅です。私は非常に嬉しいと思ったことがあります。カナダの保険会社がマイアミにリゾート住宅を造って観光客をよぼうという、国際コンペをやったわけです。私はその日本スタイルという条件の審査をロンドンでいたしました。スタッフを連れて世界中を見て回った保険会社の社長がその条件になぜ日本スタイルを選んだのか、こういうことはこれまでに例がありません。ヨーロッパがいちばんいいと思っている人達ですから、だいたいヨーロッパスタイルで募集するのが今までの常識でした。この国際コンペから初めてジャパニーズスタイルという条件が出てきたのです。

社長は、実際に世界の住宅を見て歩いて、日本の住宅がいちばん生活しやすいと思ったというのです。それで「ジャパニーズスタイル」という条件を付けた。私は非常に嬉しくなって審査に行ったのですが、とにかく、ヨーロッパの審査員はどういう建築がジャパニーズスタイルか全然わからないらしかった。いろいろ説明をしましたが、いちばん大きな理由は開放的であるということでしょう。

いま建築界では神さまのように言われているドイツのミース・ファンデル・ローエという建築家がおられます。戦後、ナチに追われてアメリカに渡り、ファンズワース夫人という大富豪の未亡人と結婚しようということになり、新婚住宅を造ったのが有名なファンズワース邸です。

(写真 11)



写真-11 ファンズワース邸

ところが、住宅がだんだん出来上がるにつれて未亡人が「なぜこんな設計なのか」と怒るわけですね。とにかく四面全部ガラス。窓というよりもガラスだけです。少し日が射すと暑くて暑くてしょうがない。暑いから窓をちょっと開けると藪蚊がダァッと入ってくる。「網戸を付けて欲しい」「プロポーションが悪くなるから駄目だ」「こんな家には住めない」。とうとう訴訟を起こし離婚の裁判沙汰になりました（笑）。

そういう家がファンクスワース邸ですが、実はその原型は 1929 年の博覧会でドイツ館のパビリオンにありました。非常に開放的なパビリオンがバルセロナで実現しております。ミース・ファンデル・ローエは、それまで窓の小さい煉瓦造のグルーミーな建築の設計をやっていました。だいたい石屋の息子さんですから石造の建物がお得意です。それがなぜ突然開放的な建築になったのか。このところについて少し大胆な発言であったのですが、私が出席した「東西文化の交流」というドイツのシンポジウムで、ミースの開放的建築への変身はたぶん日本建築の真似ではないかという推測について話をしたのです。

ノーベルプライズをもらったような方も入っておられる、40 人位の非常にインティメートなシンポジウムでした。知識人が列席されている中でちょっと言い過ぎかなと思って心配したのですが講演が終わって「いや、実はその証拠がある」とおっしゃる方が出てきました。そのときに、少し大胆な発言だと思ったのですが、言うべきことは言うべきだなとたいへん勇気づけられました。ミース・ファンデル・ローエの事務所におられたチーフで九十何歳の方がベルリンに存命で、その方にお目に掛かって確認をいたしました。「確かにそうだ」ということでした。ではなぜガラス貼りの建築になったのでしょうか。

京都に醍醐寺というお寺があります。皆さまもご存じだと思います。この醍醐寺の書院を真似している事が判りました。いくらミース・ファンデル・ローエでも、醍醐寺がどうして住めるようになっているか、あまりご存じなかったのではないかと思います。雨戸、襖、障子。それだけのコントロールの装置を使って初めて開放的な住宅は住めるようになるのです。ところが、そういうものを全部省いてガラスだけで造ったら住めない住宅になるほかはなかった。アメリカに渡ったミース・ファンデル・ローエは、その後レイクシュアドライブというアパート（写真-12）とか、シカゴにある有名なオフィスシーグラムビル（写真-13）とか同じようなものをこの方式で造ります。



写真-12 レイクシュアドライブアパートメント

この方式というのは、水平型の窓をとって、とにかく全部同じ寸法のガラスで造るというやり方。西洋型の超高層ビルです。この形式がずうっとシカゴを圧倒しアメリカのオフィスビルやアパートの原型となった強大な影響力をもった建築家でした。



写真-13 シーグラムビル

日本建築の細やかさ

テロ攻撃に遭った世界貿易センタービル(写真-14)は、ミノル・ヤマサキという日系の建築家が設計されております。私もお会いしましたがとてもすばらしい方で、親しくさせていただいた関係です。この建物は物凄く安全に造られた建物です。真ん中にシャフトがあっといういろいろな工夫がされています。高層ビルをやろうと思えばそれだけの工夫が必要です。「アメリカだから、巨万の富を使って世界最高の超高層ビルを造ったのではないか」とんでもありません。高層のビルの設計では、エレベーターシャフトがガンになります。エレベーターの数が多くなると、下のほうの階では実際に使う有効面積が減ってしまいます。それを何で解決したか。ヤマザキさんは乗り換えエレベーター方式を発明して見事に解決された。30階ごとにそれぞれ乗り換えのフロアがあって、シャフトは同じで、エレベーターの台数は増えるという形の解決です。そういう意味で有効面積が増えています。

さらに、外観ですぐわかると思いますが、なぜ60cmぐらいの幅で縦格子のような外観になっているか。これによってオフィスの内部空間の印象が非常に柔らかくなっているのです。つまり格子戸です。しかも天井から床まで窓ですから奥に深く光がとどきます。今までオフィスのスペースは窓から6mから8mであった寸法を、その倍の13m取ることができるようになりました。このインテリアによって非常に快適なオフィスのスペースが実現したわけです。しかも、このビルの工事中に私はヤマサキ先生にご案内いただいて見ましたが、造るときに上のほうは風が強く、職人の人達が風に飛ばされる恐れがあります。しかし狭い寸法の縦枠だとそこにつかまって防止できる、職人の方々が安全に工事ができた。本当に日系の方ならで



写真-14 2001年9月テロ攻撃を受けたWTC(世界貿易センター)

はこの細かい神経が加わっております。

テロ攻撃があったときに私はたまたまアメリカにいました。時間的に朝一番というときでしたから、私の推定ではWTCに5~6万人が働いておられたと思います。激突されたところから上階は避難は無理だったかと思いますが、下のほうの階の人はほとんど全部避難できて、3000人がなくなっております。ということは、避難階段も大変良く計算されていた。全体にそういうバランスがとれていたということです。これが横にでもビルが倒れたら周辺に甚大な被害が出たと思います。本当に綺麗にバランスしていたために壊れ方も見事だったと言うと変ですけども、そういうことだったわけです。

このことを私はアメリカから、メールでサンケイ新聞の「正論」に送りました。そうしたら元警視總監から「これだけの被害を出した建物がなぜ安全なのか。とんでもない！」とたいへんお叱りを受けたそうです。しかし私は、設計されたロバートソンさんとミノル・ヤマサキさんの事務所にそれぞれ確かめて、正確な情報を日本に送ったのです。そういうバランスのとれた、しかも日本的な計画です。それは縦長の格子のような窓です。このミノル・ヤマサキさんの建物によって、ニューヨークに日本型の超高層が沢山できるはずだったのです。そこが攻撃されたということは私は日本の文化のために残念で悲しい思いをいたしました。日本の建築の考え方、日本の文化がどれほど細かいところまで人間的に考えて計画をされたか、その事を私は改めて強く感じさせられた事件でした。

急がれる建築士法・建築基準法の改正

私は何でも日本が優れていると言うつもりはありません。日本で相当改善をしなければいけない問題が目下の急務になってきております。確かにいまライフスタイルは各国のものを取り入れて混乱しているように見えますが、これは一種の文化ミックス現象です。その文化ミックス現象のあとに次の時代の新しいライフスタイルが出てくるわけで、それを待つしかないと思います。しかし、私の思いすごしかもしれませんが、今日本は何か呪縛にかかっているのではないかと。そこで最後に五つの問題を挙げて、美しい人間環境の実現を願ってやみません。

第1の問題は、建築基準法が50年前に最低基準を決めるとして作られました。しかしいまこの基準法にみんな安心してその後、あまり技術的な開発をしなくなった。だから、新しい建築がもう日本から出なくなっているのではないかと。何とかして建

建築基準法を改正、あるいは廃棄しなければいけない。これは実は英国にならって作ったものです。いま英国は殆ど廃止しております。ですから、日本も建築基準法についてやめることを検討してもいいのではないかと。どういうふうによめるか、どういうところを残したらいいかまだいろいろ議論のあるところだと思っておりますが、とにかく早くこれをやめないとみんな温室に入ったように、何か問題が起ってもすべて法律のせいだといって転嫁してしまう。質的向上ではなく責任回避になってしまっております。これは直ちに改めなければいけないことだと思っております。

第2は建築士法の問題です。日本では建築士法を作りました。建築士と建築家とは相当違います。今までヨーロッパのほうは建築家（Architect）が建築を考えてきたのですが、これは学校教育が間違っていました。学校教育ではもっぱら造形的な訓練だけをやって、エンジニアリングのスタディを疎かにしていました。そのためにいま改めてポリテクニクの大学が評価され、教育の改正をしなければいけないということになってきております。

これも日本が非常に優れているところなのですが、造形と技術を一緒に教育し建築士として資格のテストをしています。ところが政府は建築士を応援しないのです。建築士と建築家とが競争して国際コンペをやると、欧米はみんな政府が出てきて応援する。ちょっとした誘導資金ぐらいは提供したりします。おまけを付けて競争することになるものですから、国際コンペで連戦連敗という状態になってきています。とにかく、建築士の法律をもう少し国際化しなければいけない。日本の建築士が海外で本当に活躍できる場はいまありません。「きっとアジアは日本の建築士を迎えてくれるのではないか」。とんでもありません。かつて植民地ですから顔は宗主国に向いており、そちらの法的な問題で拘束されることとなります。これは何とかして早く国際化して変えなければいけない点だと思っております。

第3は教育の問題です。日本は駅弁大学をつくったために建築でもやたら学生数が増えました。しかし、ヨーロッパは実に用意周到で、ユネスコで25年前から専門家の適正数の研究をやっております。それがネットワークの大学制度です。学校の先生も学生もどこで勉強しても単位が取れるようにするという説明でしたが、実は世界の中でヨーロッパはもう飽和状態で、新しい建築の計画はほとんどありません。ではどこがこれから建築の需要があるかという、アジアです。ですから、ヨーロッパは元の植民地であるアジアを克明に調査して年間どれぐらいの工事量が出るか。どういう建築が要求されるか。それに必要な建築家はどれぐらい必要か。学校に割り当てを決めて対応しようというわけです。

そのことは、ユネスコのたった6人の専門家会議がチューリッヒであり、これに出席し

で初めてわかりました。それだけのことをやって建築家をつくっているのです。それに対して日本の建築士の作り方は、毎年1万人ずつ増えており、いまや100万人時代とされています。何とかしてこれは変えなければいけないということが出てきております。しかし、数が多くても、実際にアジアの仕事をやれるようになっていければいいわけです。問題は質です。

産業としてのシステムビルディングを

第4は商社の問題です。商社というのは、日本の非常に優れた貿易の緩衝帯と言ってもいい機構ですし、流通を促進し総合的成果を達成する機能と言えます。ところが、どこかの国の陰謀ではないかと思われるぐらい、いま日本の商社は圧迫され力を失っています。これからの環境づくりを考えるとこれは問題ではないか。なぜ問題かと言えば、政府ですと省庁に分かれておりますから、日本には陸軍と海軍があつて空軍がなかったように、とにかく相互の関係をつけることがほとんどできない状態にあります。いま必要な「環境づくり」は都心であると言ってよろしいと思います。とにかく都心は、交通も、通信も、建築も、土木も、運輸もみんな関係している集合体です。そういうものをどうやってつくるのか。今後21世紀に、アジアでは1000万都市が20ぐらいできると推算されています。これは日本がやる以外に他でやれるところはありません。鉄、IT、ロボット、自動車。ありとあらゆる産業を束にしてそういうところに投入していく。そういうことをやれるのは商社以外にないのではないか。ですから、商社のようなものが何か必要になっているのではないかと思います。

第5は、システムビルディングという近代的方法を、何とか日本の建築産業にとりいれて近代化しなければいけないということです。しかし各ビルが個別でやっています。そういうオーダーメイドの建築の作り方は一方においてあっていいのですが、しかし、ビルというのはだいたい天井高はそう変わりあるものではありませんし、ドアも建具も同じです。外壁のサッシなども同じです。したがって、そういうものの標準として、モジュールを決めシステムを作る。これは翻って言えば、日本の木造でやっていた3尺×6尺のシステムと同じことなのです。これからの仕組みの中で、これをもう一度新しく復活して適用して近代化の道を開かなければいけないと考えております。新しい都心の構想について私のイメージを述べて終わりにしたいと思います。

今回私はベトナムに行って、ベトナムの国会議事堂の国際コンペの審査をしてきました。ハノイに行って驚きました。何千台のバイクが右往左往する大変な都心です。これは正しくホンダのバイク都市と言ってもいい状況でした。これからもっとひどくなっていくと思います。こういうものを何とか解決していかなければいけないわけです。そうすると、バイクや自動車売るだけではなく、道路も一緒に造っていかなければいけない。自動車が入り込めるような建物も一緒に造っていかなければいけない。また公共的なインフラやITも必要になっています。そういうものを一括してやっていかなければいけない。そういう都心再生の要請に答える時代で日本を構想すべきだと思います。それをやれるような能力を持っている国は日本以外、他にありません。鉄、ガラス、IT、テンションワイヤー、光ファイバー、コンピューター、自動車。そういうものを全部やれる国は日本以外にないわけです。

日本はなぜいつまでも束縛されているのか、そういう束縛をなるべく早く解き、世界に雄飛する時代がきていることに気づき、拘束をとりて自由に活動できるような変革がまたれます。

私の話は少し飛躍した点があったかもしれませんが、ぜひ皆さまのお知恵を拝借して、更なる展開を求めたいと思います。またホンダのような企業が、オートバイだけではなく環境づくり、都市づくりに日本文化を軸として世界に雄飛する時代が来ていると思います。以上のような日本と、日本を取り巻く欧・米・日の中で21世紀は日本文化の存在感が、ずっしりと重みを増す世紀になるという私の予測を述べました。

これで私の話を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)